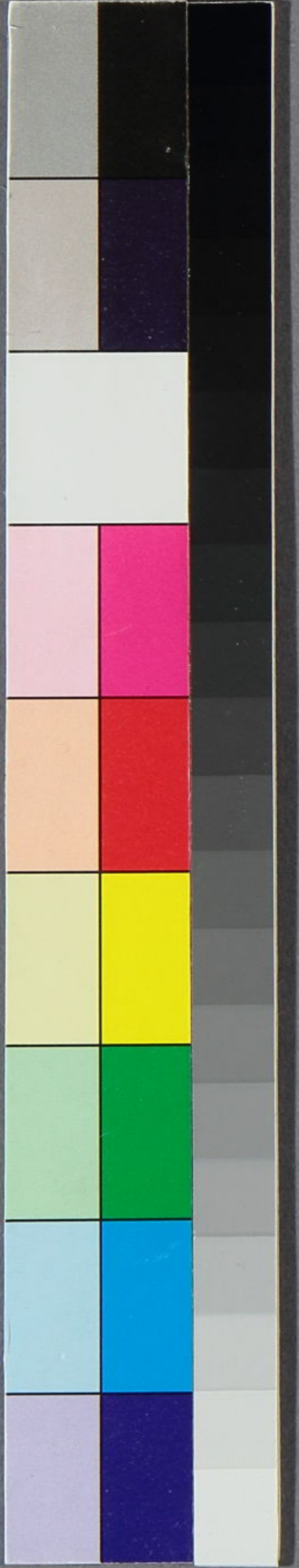


八代集抄

詞花春夏
秋冬別

三十二

特別
イ 4
3163
104(32)



貴
14
3163
104(32)

朝花和歌集 十卷

并負八字四百九首は撰らるる作者入之古今作者不入

袋草子并抄曰

崇徳院のりわをせむひくのられ物りとりわつた京大史
石輔の撰之天喜元年六月二日よりうけりて。仁平年
中より巻之御後のみち五よりわつた。法製家かゝ坂軌綱
頼保感経等乃并を降しより。すまつら法輔の法
使とくく石輔乃事よ持集りて袋草子より何り
巻後乃本ハ布目乃之紙乃草子よりあきこすけのつれ
白きく 八字九拾五首曰



宣下状云

被_レ院宣云_ク自_リ中古以来不入勅撰_ク亦和并等_ヲ
眞_ク被_レ撰集者仍執達_テ如件_ノ教長謹言

六月二日

各議教長奉

謹上 右京大夫殿

け集を_{アキスネ}取_ル輔_トつ_レけ_ルり_クの_ラ。子_ニ是_レ法_ノ補_ノ給_ト持_テ持_セ
ら_レる_{コト}を_レ父_ノ口_ノ不_レ法_ノの_ラあ_ルこ_ト一_ツ切_リけ_レ補_ト
又_レせ_レ合_セて_レ進_リざ_リき_ニ被_レ撰_ル後_ノの_ラ崇_正法_ノ院_ノの_レ法_ト
使_レこ_ト法_ノ補_トい_レ集_ヲを_レ持_テ集_メせ_レる_{コト}時_ノに_レい_ハる_{コト}
る_{コト}を_レ父_ノ口_ノ不_レ法_ノの_ラあ_ルこ_ト一_ツ切_リけ_レ補_ト

行卷一

父_ノ口_ノ不_レ法_ノの_ラあ_ルこ_ト一_ツ切_リけ_レ補_ト

撰者_ノ取_ル補_トの_ラ三位_ノ右_京大夫_ノ正_三位_ノ頭_ノ季_男法_補重_家

取_ル昭_法師_ノの_ラ父_ノ有家_ノ知_家の_ラ之_レ祖_ノ六_条家_ノと_レい_ハる_{コト}

乃_レ一家_ノの_レ祖_トなり。後_ニ成_ルつ_レと_レい_ハる_{コト}乃_レ取_ル補_トの_ラ重_家

名_ヲも_レ取_ル補_トと_レい_ハる_{コト}乃_レ取_ル補_トの_ラ重_家

基_ニ後_ニ乃_レ門_ノ才_トと_レい_ハる_{コト}乃_レ取_ル補_トの_ラ重_家

等_ノ明_カなる_{コト}乃_レ取_ル補_トの_ラ重_家

外_ニ乃_レ取_ル補_トの_ラ重_家

是_レと_レい_ハる_{コト}乃_レ取_ル補_トの_ラ重_家

を_レ父_ノ口_ノ不_レ法_ノの_ラあ_ルこ_ト一_ツ切_リけ_レ補_ト

了れらるるうそせり。わがさくする御歌集のハ三
 人目むりを歎きこもく一冊のものありき一六六
 冊を被ぶらひうへせんといひしもの。いふかれしものも
 けしうハ何れもさう傳われといはれり
愚案々書ハの多御歌集ハ此は松道不富
 何侍房云金葉詞苑あるハ并乃海かさうりてひしうか
 りきこわらるる多多くゆる。今もさくしるるも此れは人
 詞苑集乃名目ハ英詞乃花麗あるとつりしもの
 ありや。又今序より史和歌者託其根於心地發其花
 於詞苑者也。こけ語意を用ひて詞苑集乃字を
 としめちるるけしうもさくしるるやゆらん



春の春部

播河院御時百首
 け百首のすおり
 集の証者

こわりやうさりの
 立春日東向解氷心
 こけりやのさかたの
 華より有り徳周多花
 花照袖中おあひさくは
 虫はのまことこへんおは
 せぬあつちも海地棚の
 とせよこおれ泊瀬文選
 ちのふりつられり。

詞苑和歌卷第一 春

播河院御時百首并廿二
 春立心と清く 大茂の匡房 は松道名

こわりやうさりの清うちとけり
 とうまやうさりの清うちとけり
 寛和二年内裏并合子西原
 よめり 若原惟成 拾遺集
 ちのふりつられり。ちのふりつられり
 こけりやうさりの清うちとけり

滋賀樂近江也

明之由のりも昔に

しつら乃またと同様に

あつ里の春めき

子く一野り後見存の

てまかりかりしる後

それい古つとよ子け

こわいひのい

つあさうよわりまらえ

我に冬く終りて

いあつあつあつあつ

この午終もあね人

けあつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

天徳四年丙申奇命によめる

三月晦日云

平兼盛 在撰傳

あつ里の春めき

子くあつあつあつあつ

あつあつあつあつ

道命法師 在撰傳

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

春さつあつあつあつ

冷泉院東宮のやまのついで首奇

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

赤深衛門 續信東院

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつ

春の意のあはれを
身乃心い懐く

子見しよその野を
野にふねをさゆけ
はねまひくさやうし
こねとけむれぬの道
あきこれいなき
ま風は花をちす
歌何事い只吹たれ
梅くことあうくか
初しそそ花をちす
ぬれふ何もれい
梅の花白ひをるの
梅くまひひれり
こまきさ高きあり

歌よきと

新院清朝 崇徳院
孝和皇子

子見しよその野を
おうひうさうさうすれ

梅の花まきとくま

源時雄

あきこれいなき
ちとさねあいのさうさう那
梅をよめる 大政大臣の
公行
梅の花白ひをるの
何くことあうくか

詞一

あきこれあはれを
親休と懐せと入る

あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを
あきこれあはれを

歌よきと

信濃法師 在る信濃

あきこれあはれを
はさうねとまはれさうり

教原國経

あきこれあはれを
あきこれあはれを

僧都覺雅 別号云子
亦大

あきこれあはれを
あきこれあはれを

天徳四年一月裏舟合子柳を信る

とわひめのいしりめ

系傳くゝに書れど
わさるれに柳の葉を
依保姫のわさるめ
さすしおわさのなご
心に鳴く

平兼盛

とわひめ乃いしりめ
さすしおわさのなご
心に鳴く

贈大友乃家礼并合よりよ

源季幸 金葉集

いりまれのあはれくさるる風り

いすりめくせん河をやまれ系

と柳を流る 源道深 拾遺集

うさると乃子乃まれ柳さるる

うさると乃子乃まれ柳さるる

贈大友乃家礼并合よりよ

系傳くゝに書れど

わさるれに柳の葉を

依保姫のわさるめ

さすしおわさのなご

心に鳴く

とわひめのいしりめ

よわり白氏長安集
北八二天宮閣早春詩
塙柳誰家曝露
塵とつる河をよ
さすしおわさのなご

予やまの木のこも栢

源の木の交り

れは栢もさるる

しは栢もさるる

さすしおわさのなご

心に鳴く

とわひめのいしりめ

予やまの木のこも栢

源の木の交り

れは栢もさるる

しは栢もさるる

さすしおわさのなご

心に鳴く

とわひめのいしりめ

予やまの木のこも栢

源の木の交り

源道深 拾遺集

と柳を流る

源道深 拾遺集

と柳を流る

源道深 拾遺集

と柳を流る

源道深 拾遺集

と柳を流る

源道深 拾遺集

と柳を流る

昔の御母のあり
 くれまぬのうすなご様
 様のうすなご御母の
 は紅白白の御母の
 皆白やとのこぞ入ると
 ちいづいてまへられた
 今鏡七五輪おのこ
 乃傍を様のま匡
 房中納りの白やと
 申すまへしと
 は負侍を御り
 ちいづいてまへ
 詞を辨せしと
 白やにまへた
 白やにまへた

おの康資の母のまへに
 赤松のお大納言 師兼公
 まへにまへし
 うすなご御母の
 一宮の御
 白やにまへた
 まへにまへた
 一宮の御
 まへにまへた

大納言の御母のまへに
 は判別しとあれ幸
 ちいづいてまへた
 おの康資の御母の
 まへにまへた
 赤松のお大納言
 乃様を入丸くまへ
 まへにまへた
 まへにまへた
 赤松のお大納言
 乃様を入丸くまへ

大納言の御母の
 まへにまへた
 赤松のお大納言
 乃様を入丸くまへ
 まへにまへた
 赤松のお大納言
 乃様を入丸くまへ
 まへにまへた
 赤松のお大納言
 乃様を入丸くまへ

前住院出雲 羽衣

可^レね^レん^レつ^レつ^レの^レな^レは^レれ
 いた^レん^レつ^レつ^レの^レな^レは^レれ

このころのころ
 大内山に寄るのころ
 物産二白雲の九重
 立寄られた大内
 ころころやあそび
 兼捕りのあそび
 本身らも心
 まいりふらふら
 白川(山)

白川のまののころ
 皆花のまの
 昔の花のまの

まのころのまのころ
 入心作のまのころ
 まのころのまのころ
 播磨細今流十五
 伏見のまのころ
 下流のまのころ
 人をまのころ
 まのころのまのころ
 りまのころのまのころ
 又のまのころのまのころ
 ころのまのころのまのころ
 まのころのまのころ
 他なるまのころ
 今のまのころ

このころのころ
 おららやまのころ

源師賢期長
 まのころのころ
 まのころのころ
 まのころのころ
 まのころのころ
 源信光期長
 まのころのころ

白川のまののころ
 まのころのころ
 まのころのころ
 まのころのころ

まのころのころ
 まのころのころ
 まのころのころ
 播磨細期長乃伏見乃山
 まのころのころ
 まのころのころ
 源師賢期長
 まのころのころ
 池なるまのころ
 まのころのころ
 一条院浄時乃山
 人乃まのころ

とは愛おしく候は
ふし方々の那の
去昔云心は世方様れ
み影のまふもまふ
まがらふもそれ世
て二茶時はあつる
くひも中もまふも
柄とまふも十九重
とる苗坐の事わら
去物の終骨也と
定家河原集秀
幾十首の内盛双
紙も彼人才た秀
也卒命三毛不事
する田舎人

よゆれれらる花を
よめとおせしとあ
伊勢大補
いふらあつるの
ふらあつるの
新院のかかむ
せりらるるよめ
大納言忠教子
志近中将
あつるよめふ人
あつる人のち

花んて山居の
いぢりいぢり
あつたれに
人の花の
ほなまふと
さつら花
花の
まの
り
春
ふ
ま
古里乃花の

人こあつる
こらよわ
源登平
伊勢
春乃ゆ
花
春
古里乃花

贈古矢良母
金葉作者
長まの母

よめり

よふ人もあはれなる里の
浦庭あまけりる夜
あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ
あはれなるよふ人も
よめりなる花あり
よめりなるよふ人も
さくらりくよめりなる
花のよふもあはれ
よめりなる花あり
よめりなるよふ人も

若原兼房の捨の
伝ふるは若原兼房

よめりなる花あり
よめりなるよふ人も

よふ人もあはれなる里の
浦庭あまけりる夜

あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ

源信光朝臣
源信光朝臣

さくらりくよめりなる
花のよふもあはれ

よめりなる花あり
よめりなるよふ人も

若原兼房の捨の家
若原兼房の捨の家

あはれなる花あり
あはれなるよふ人も

あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ
あはれなるよふ人も
よめりなる花あり
よめりなるよふ人も
さくらりくよめりなる
花のよふもあはれ
よめりなる花あり
よめりなるよふ人も

あはれなる花あり
あはれなるよふ人も

あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ

あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ

あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ

源信光朝臣
源信光朝臣

あはれなるよふ人も
けしむ龍あはれ

しる

庭のあふちりみち
これい雪こいんま
つたの香りる
あふちり

ちる花のせむとち

春はくちりて花
しらりあふちり
信をせむとち
山川のと花のせむ
よふけしあふちり
よめり

ちる花のせむとち

庭のあふちりみち

有仁公
花園の太皇
輔仁公

庭のあふちりみち
これい雪こいんま
つたの香りる
あふちり

ちる花のせむとち

春はくちりて花

しらりあふちり

信をせむとち

山川のと花のせむ

詞一九

ひるふあふちり

あふちり

いぬ人を結ぐねの
結兼の持はし
いぬ人を結ぐねの
あふちり

ひるふあふちり

あふちり

麗景殿乃清の家

いぬ人

あふちり

あふちり

河院沖時百首

いぬ人を結ぐねの

あふちり

あふちり

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

新院
牡丹
老人惜春
橘後編

新院
牡丹
老人惜春
橘後編

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

いふまじりあや
雪乃のちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき

詞花和歌集卷第二

長

和月乃一月のあや

増基法師

和月乃一月のあや
何はとのややおひわ
雪乃のちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき
おのちをぬき

かしの木方の使ひ
かたな乃ちうりの使
中將が梅津にむす
るりる。根原忠房
年をすくかけ著
母兄乃重友とく
しりともあつたせ
れ著りかつたせ
つねと集目と
その使はあつたせ
林とあつたせ
本錦起つたせ
つとつとつと
山海のなまやと
著けつとつと

かしの木方の使ひ
かたな乃ちうりの使
中將が梅津にむす
るりる。根原忠房
年をすくかけ著
母兄乃重友とく
しりともあつたせ
れ著りかつたせ
つねと集目と
その使はあつたせ
林とあつたせ
本錦起つたせ
つとつとつと
山海のなまやと
著けつとつと

月坊内侍 著

詞二

ひりやのいね
心明く

ひりやのいね
心明く
母乃ちよあつたせ
まこと八雨居函極人
まこと乃母亦あつたせ
まこと乃母亦あつたせ
らつとつとつと
赤子う列子う御
すつとつとつと
天地の正力の無窮
ま極りつとつと
つとつとつと

ひりやのいね
心明く
母乃ちよあつたせ
まこと八雨居函極人
まこと乃母亦あつたせ
まこと乃母亦あつたせ
らつとつとつと
赤子う列子う御
すつとつとつと
天地の正力の無窮
ま極りつとつと
つとつとつと

ひりやのいね
心明く
母乃ちよあつたせ
まこと八雨居函極人
まこと乃母亦あつたせ
まこと乃母亦あつたせ
らつとつとつと
赤子う列子う御
すつとつとつと
天地の正力の無窮
ま極りつとつと
つとつとつと

一々ふる初巻
 以師の今昔の事
 上平切の巻一葉
 少るを想ひふら
 我の心はふら
 さらぬ心は毎年
 結縁さするまじ
 らん心はあはれ
 山崎と乃の心
 常ハ山居よと
 常たてぬ人の教
 結とつたはや
 子けまハ心のは
 やまひの乃こ
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

山崎の心は
 結縁さする
 常たてぬ人
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

時をあらわす
 わり結さす
 結とつたは
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

時をあらわす
 わり結さす
 結とつたは
 子けまハ心
 やまひの乃
 一葉

こやの他にはの雲
昆陽と蠶屋とこい
すゝをうらうとさひ
きゝ糸のこ草根とよ
めれあはせ
新しうのこく
水鶏の戸多きや
こく故長明の
あめゆきとさゆい
こくやとさゆい
あ月もれ月をや
こく明くやとさゆい
さゝし能の娘を
へー中古たき
く縁とさゆい

ひくきくつとらこくつとらこくつとれ
土市門師房云古大倉乃家乃身命作り
くふよめ
源光家朝臣且権徳云
光之息
新しうのこく
何けくのちこくつとらこくつとれ
新しうのこく
忠臣女志臣女
古大倉乃家乃身命作り共子補信續
あ月もれ月をや
やせ乃源光つとらこくつとらこくつとれ
堀の院沖時源光首身なり
よめ
大倉乃家乃身命

詞二 三

わさしもこりこや乃
吾姫子り蠶屋とこい
こくひの女乃わさ
れをこくの娘を
いすゆき梅の味
あまこくつとら
こくつとらこくつとら
水尾もいあゆみ
まてんやとさゆい
いれとさゆい
せりすゆい河海
所り延喜式難云
凡難波津頭海中三立ッ
濤標若石標杉折
者サリ被来テ枝去ニあ

わさしもこりこや乃志の屋れあ月あ
いすゆき梅の味
古大倉乃家乃身命
源忠季
こくつとらこくつとら
水尾もいあゆみ
いれとさゆい
せりすゆい河海
所り延喜式難云
凡難波津頭海中三立ッ
濤標若石標杉折
者サリ被来テ枝去ニあ

源朝臣のひをたふ
まゝくちもせしむる
せくおのひふとゆ
蜜こゝろ生しやも
と喜みけれは珍運
ふ月やみ精川より
精川はうははしり
こゝろねたけし

月やみはあはれ
ほむ乃あはれ
まにまのふり
を序あはれ
よみくし

あひらきとせしむる
六条右大臣孔房家孔房の
源朝臣のひをたふ
よめる
読人ふた

ふ月やみ精川より
おのひふとゆ
水色細涼とよめる
源朝臣のひをたふ

源朝臣のひをたふ

月やみはあはれ
まにまのふり
を序あはれ
よみくし

松川乃袋の床れ
松川の松木はすり
まのとりは乃袋
也常の信ま伏せ
らふ心ますめ
まのりまの袋

可なりあはれ
やうしあはれ
まのりまの袋
こゝろねたけし
水層せくはは
やのあはれ
まのりまの袋
可なりあはれ

松川乃袋の床れ
まのとりは乃袋
也常の信ま伏せ
らふ心ますめ
まのりまの袋
長保五年入道前大臣乃袋
源朝臣のひをたふ

源朝臣のひをたふ

可なりあはれ
やうしあはれ
まのりまの袋
こゝろねたけし
水層せくはは
やのあはれ
まのりまの袋
可なりあはれ

こころのほしや
一説が月のほしは
乃ゆきよし

片ねかりのさけや和
同きねむり月さるは
早合さるる書かれ
い入歌乃ゆきよし
ゆきかりのしほは淡
下あふひとせうつ

晩より病状なり
あて得んまこと見ぬ
文集三編シラククに
山崎鳴子官樹紅
ゆきのほしやうら
あふねを兼てのこ

同書七月のよめ

太皇太后官大尉

片ねかりのさけや和
同きねむり月さるは
早合さるる書かれ
い入歌乃ゆきよし
ゆきかりのしほは淡
下あふひとせうつ

秋よかりのさけや和
同きねむり月さるは
早合さるる書かれ
い入歌乃ゆきよし
ゆきかりのしほは淡
下あふひとせうつ

ひかりのさけや和
同きねむり月さるは
早合さるる書かれ
い入歌乃ゆきよし
ゆきかりのしほは淡
下あふひとせうつ

詞三

詞花和歌集巻第三

秋

いさよと 曾祿好忠

やまのり乃香羽田の
あふり種をうた
おまや右今川倉
山麓乃一の花露
あふり人ゆき秋の
り香はまれ祥ぐ
あふり種をうた
とつにまらあふい
やうくれいあふい
あふりとこ

あふりとこ
あふりとこ
あふりとこ
あふりとこ
あふりとこ

やまのり乃香羽田の
あふり種をうた
おまや右今川倉
山麓乃一の花露
あふり人ゆき秋の
り香はまれ祥ぐ
あふり種をうた
とつにまらあふい
やうくれいあふい
あふりとこ

はのまら 住持々々 比大は為基

はのまら 住持々々 比大は為基
住持々々のあふり種をうた
住持々々のあふり種をうた
住持々々のあふり種をうた
住持々々のあふり種をうた

あふり種をうた
あふり種をうた
あふり種をうた
あふり種をうた
あふり種をうた

ち物をと恨了。
也は恒に持別の上は六
物林とてんいりて
蘇乃ちあますく
我多とてく七多
系をわけてくす
いすいりていあり
はくあまをまき
寛和二年六月廿八日
すまのまのまの
ゆーまのまのま
まのまのまのま
常いゆーまのま
まのまのまのま

七月七日武部大輔治良葉のま
まのまのまのま
蘇乃ちあますく系をまのまのま
七りたりとやけさまのまのま
はくあまをまのまのま七月七日
まのまのまのま 院治良葉
まのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
ゆーまのまのまのまのまのまのま
東暦二年丙寅身命のまのまのま
若原院總持也

調一

七たりりらるるまのまのま
七たりり我多をくす
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
て我多のまのまのま
合を強のまのまのま
誰のまのまのまのま
まのまのまのまのま
いりるれにまのまのま
二里のまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
七たりりしたまのまのま

七たりりらるるまのまのま
七たりり我多をくす
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
て我多のまのまのま
合を強のまのまのま
誰のまのまのまのま
まのまのまのまのま
いりるれにまのまのま
二里のまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
七たりりしたまのまのま
寛和二年丙寅身命のまのまのま

まきしむらや杜牧之
 の阿彦官殿の煙斜
ミタカハタタニセウラノシ
 霧横焚椒蘭也
 つる月情よりし
 竹のうや椒蘭香
 かわはくさかりや
 心明し
 阿ま九門の面格書
 古今ては懐懐
 懐こもつて向り
 おいおつて
 と本房より
 うへへ
 あまのこころ
 人忘れ

大中居能宣期居
 かわはくさかりや
 七夕をよめる
 阿ま九門の面格
 あまのこころ
 懐懐細乃伏
 懐懐の
 あまのこころ
 阿まのこころ

源順

の人目をよつて
 母まを
 のみ
 阿まの川
 けさ
 らや

源原能總期居
 阿まの川
 三系大政大臣の家
 源順
 阿まの川
 三系大政大臣の家
 源順

月影をよそとくも
みよ世もすまんと
すもんと送るも
伊のれいおき見
心明し

古清の遺家成 三位家保
乃長

春交とくやハ
月一もの一もハ
胸字におきと月
心明し

よ世のくもとくも人こそすん
雅定公
大長
名義大長雅實男
いられいおき見
秋一も一もよそとくやハ
家よ奇合志侍らるもよそとくやハ

古清の遺家成
中納言

春交とくやハ
月一も一もハ
月を度移るもよそとくやハ
心明し

三條院御製

詞二

秋よ又あそんありし
心ハ明あしけ帯に
寛安内供なごそ人
乃正氣とくやハ
心明し
世よのくもとくも
年院ふ成せ給て世目
と正気とくやハ
こりりやとくやハ
よかけし心の中を
あそとくやハ
王法佛は昔よりあり
世と秋送るの心明し
秋乃れ月影の
彼阿多し

秋よ又あそんありし
こよひえり乃月とくやハ
心明し
天台座を明杖
あそとくやハ
かぬそのの秋乃れ月
関白前大臣乃家
忠通公
藤原重基
金葉集

藤原重基
金葉集

秋乃れ月乃ひくわれも
本れ下りけささけりり
ひえ乃やとれ念仏のあり月

山に古今此言と奉
まし秋月のまけき
るよよあり

あまの月定ま事松
比鷹乃言山井見の中
晴て入ましくさう月
乃面白ま心よけ山乃

念仏の羅障の中
西宮浄土を觀せ
朗詠雖斗悪分
接長古疾月披津霧

秋乃よれ月心乃
ひくこまふ氣とま
八月十五夜昔信

とんくよめる 良暹法師

あまの月定ま事松
るましく見つる秋乃よれ月

系極お太政大臣家乃
源光親朝臣

秋乃よれ月よる乃い
いつるまのつるを可
忠通

関白お太政大臣家
乃心をよめる
ひくこまふ氣とま

濃乃勅言此勅奉也朱
蕉院乃淨國忌よあ
よよありて中此より
に滅されれ昔の式
さうと尋らうり
つ約章の事おあ
秋乃よれ霧も帯ぬ
よまいおあま
あまの月定ま事松
山乃あま
に
こ

せきさちよりさう月
古東門舊家成り家よ
隆縁法師

秋乃よれ霧もくも
よまいおあま
月を結こらる

あまの月定ま事松
るましく見つる秋乃よれ月
月定ま事松

秋乃乃佳きものぞ

ひさしに

すしに

こまひ

り

ひさし

秋の九月の

ひさし

ひさし

ひさし

ひさし

こや

ひとり

雨居乃秋の

のき

新原忠兼 金葉

秋乃乃佳きものぞ

ひとり

寛和二年内裏

まひ

秋乃乃佳きものぞ

ひとり

源

ひとり

風

秋のなつ

る

る

こ

す

乃

秋

ま

こ

そ

象山

只

大江

秋乃乃佳きものぞ

ひとり

和泉

秋乃乃佳きものぞ

ひとり

曾孫

そ

い

新原

萩乃野の花を
 こころの秋より
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を
 萩乃野の花を
 こころの秋より
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を

萩乃野の花を
 こころの秋より
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を
 萩乃野の花を
 こころの秋より
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を

本院 拾遺云 中御門
 北堀門東一町 右大
 尾時平家三 豊後
 社末抄云 ありとす川
 本院の傳子 傳子
 也と云て ありとす川
 の心は
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を

神垣の心は
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を
 神垣の心は
 夕暮の月を
 相愛の心は
 露の心は
 の心は
 夕暮の月を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

白河院馬相殿より

あつちの緒を

園内侍

あつちの緒を

あつちの緒を

敦浦ノボキ 敦員敦子

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

和泉守

あつちの緒を

あつちの緒を

和泉守

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

あつちの緒を

しんがらふらふら

吉原のあつらひ

つゆ一葉のさ

とつてさひやく

とやまもあふ

たのしみも

秋風はあをさす

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

橘島仲約信

しんがらふらふら

あつらふらふ

天福三年女官并合のよめ

橘山通明渡之藤任宰相

秋風はあをさす

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

東泉五年一官并合のよめ

橘山通明

橘山通明

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

あつらふらふ

九月十三日

あつらふらふ

新院御製

秋の夕暮は月影の如く
 霜の降りては菊の花
 白く咲き乱れぬ
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ

秋の夕暮は月影の如く
 霜の降りては菊の花
 白く咲き乱れぬ
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ

源雅光 金葉集
 昔採好也

詩不^ク是^レ非^ズは^レ傳^ハ儀^ト也^{ナリ}
 此^レ花^ハ無^ク後^ニ更^ニ繁^クれ^ル也^{ナリ}
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ

秋の夕暮は月影の如く
 霜の降りては菊の花
 白く咲き乱れぬ
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ
 月影の如く
 菊の花は白く
 咲き乱れぬ

源雅光 金葉集
 昔採好也

くらしのくらしを
かたむけしむら
しに二つしに二つは
まじくよきり
いそぎも大和の鹿
のねいらいのわ
ちのうらやのう
せんよきり
つされはら
たふされはら
のうらやのう
いそぎも大和の鹿
のねいらいのわ
ちのうらやのう
せんよきり

くらしのくらしを
かたむけしむら
しに二つしに二つは
まじくよきり
いそぎも大和の鹿
のねいらいのわ
ちのうらやのう
せんよきり
つされはら
たふされはら
のうらやのう
いそぎも大和の鹿
のねいらいのわ
ちのうらやのう
せんよきり

春のほやち
あふのほやち
いそぎのほやち
られねはら
いそぎのほやち
のほやち
はら景色も
あふのほやち
いそぎのほやち
られねはら
いそぎのほやち
のほやち
はら景色も

春のほやち
あふのほやち
いそぎのほやち
られねはら
いそぎのほやち
のほやち
はら景色も
あふのほやち
いそぎのほやち
られねはら
いそぎのほやち
のほやち
はら景色も

秋の夕べの月

平兼盛

秋の夕べの月
見ゆかたのよき
心ゆく風をの
よはなほあつかり
る月のあひだ

何事として月よのめ我者

秋乃にれえと見ゆかた

一乗持政家乃障子障子あり

みえ乃しとていふ

かゝるいふ

有原雅成

秋の夕べの月
可なりとて
あつかり

秋の夕べの月
いふ乃とていふ

明

秋の夕べの月

大甲長能富朝臣

秋の夕べの月
野乃乃國草のよき
心ゆくおのれ
秋の夕べの月
秋の夕べの月
秋の夕べの月
秋の夕べの月

秋の夕べの月
野乃乃浅草のよき
前大納言公仁
秋の夕べの月
秋の夕べの月
秋の夕べの月
秋の夕べの月

若狭部光知我意今宵、旅宿在詩家とけくせまふ、伴
よかりとていふ

あつしゝのゆかり
は舟上かたれぬまは
下心世の人請道よ
はましく良神ある
時空回替るはま
まうとてあつし事
よあまれぬ所たわ
あつしとて一事と
回つてしと所とさ
世はは悔す事と
法とて能可敬味
樹可つ法名あつし
後身の家よ柘果
て中産のやとて

詞花和歌集巻第四

そ

歌ふ知

曾祿好忠

あつしゝのゆかりのんとさひふ
神をたつしとてあつしとて
樹可つとてさよふ乃弟原をたれハ
ひまわり乃とてさよふとてあつしとて
家よ舟合志伝るゝとてあつしとて
よとて
大武清通
こつしとてさよふとてあつしとて

乃唐の掃たるは吉野
 といふまゝぬれつと
 程物りまゝと彼を帝
 乃猪子高き人ゆき
 と疾一初を後言也
 山あつ子やすすむ
 炭やうまのあらし
 びらりてしらばら
 程うく雪すはよ
 成ゆくとやう雪け
 のやと成とよき
 焼りてを成とよき
 にはいとも知るる
 言すてうとすう
 年をいふとあつ

山あつ子やすすむ
 炭やうまのあらし
 びらりてしらばら
 程うく雪すはよ
 成ゆくとやう雪け
 のやと成とよき
 焼りてを成とよき
 にはいとも知るる
 言すてうとすう
 年をいふとあつ

乃唐の掃たるは吉野
 といふまゝぬれつと
 程物りまゝと彼を帝
 乃猪子高き人ゆき
 と疾一初を後言也
 山あつ子やすすむ
 炭やうまのあらし
 びらりてしらばら
 程うく雪すはよ
 成ゆくとやう雪け
 のやと成とよき
 焼りてを成とよき
 にはいとも知るる
 言すてうとすう
 年をいふとあつ

三昭

大和乃吉野成り
 雪原さ吉野山と人
 列一同よと後て
 相圃乃唐とと梅
 あせ一はまほし
 山乃いんまほし
 上乃吉今興い乃
 岩梅おあおあわ
 とよかりの梅をま
 用ひて下りて風
 とくく照月の光
 ぬすの雪のさむ
 日くくいんまほし
 後月あのかつ
 時あひ今これにま

くら繁ううま雪うほり
 大江表云
 日くくいんまほし
 山乃いんまほし
 上乃吉今興い乃
 岩梅おあおあわ
 とよかりの梅をま
 用ひて下りて風
 とくく照月の光
 ぬすの雪のさむ
 日くくいんまほし
 後月あのかつ
 時あひ今これにま

新院位よか
 眺る
 山白お太政大臣
 志通
 くれまのま
 ときふか
 時あひ今これにま

和泉武部

の雷なりしと可憐の
や乃陸まうに
此の雷れ風情は流石
おろま
これあふまじし情も
白ゆする神と逢ふ
おろ人乃甲もまじふ
を乃雷の流石なり
れやま

ねつねおま
公道世間只白髪貴人
頭上不曾饒け訪めう
らまや
ままらうさうのかりか
あまみりる屋みもあんと

おろ人乃甲もまじふ
あまらうさうのかりか
あまみりる屋みもあんと

業書のおま

成尋法師

ねつねおま
おろ人乃甲もまじふ
を乃雷の流石なり

曾祿好志

ままらうさうのかりか
あまみりる屋みもあんと

あまみりる屋みもあんと
此の雷れ風情は流石

河田四歌

詞苑和歌集巻第五

賀

一系院上東門院の初春せさせ

まひらるま 入道前太政官 清堂殿

まふり代よりゆる西の

ちとせをへはくすまんとらふ

正月一日より午の人のいじり

はらうさうのかりか 襦袢

伊勢大捕

めはくさうのかりか

一系院上東門院の初春
業書初語は寛弘
五年十月廿日後系
院はれさせしもの
五日より初春せさせ
又ゆするまのねら
てはくせまらふ
こよまらふ流石と
以翁首のけりし
おろ人乃甲もまじふ
を乃雷の流石なり
れやま

黄河十年よりいす
て玉智乃天代瑞相
ある事壬子年拾遺
紀よりいふその准
一系院を行人
子所下清きつらむ
あつてくま三神の
徳せけ子を鶴の子
に所くくし十年の
正月とがわんとも
して襦袢をうら
む

ふ世乃いしはまをかねいせり
一系乃大長乃家の障子よ位者の
可なりきつるありよめり
大中長徳宣期長
すきまありかたをいすていひまよわ
ふ代にかういんすきよりりまの
東極前太政大臣家より命と侍り
よよめり 大長乃匡房大長乃
君り代いくもりもあつていふこと
すねりりあさ月れさくんのきりり

よわ乃子年をわら
へんとく
君り代いくもりもあつし
東極相國君長若
まれの三皇とよま
つてりりり
まの代いさつてりり
海のいりりりりり
とあるいさつてりり
とつてりりりりり
柳葉をよよめり
天照太神宮戸より
むりりりりりりりり
命大玉命天香乃
あ板樹をわら

長え八年宇治お太政大臣の家は
命よよめり 徳用法師
まの代いさつてりりりりり
君り代いさつてりりりりり
赤深衛門
柳葉をよよめりりりりりり
神乃代よりりりりりり
之系太政大臣乃屏風の
よ花乃りりりりりりり
あよよめり 中務

河原のほとけに祈りて
と日本紀神代卷の事
ありと云神代に久き
るありと云れどわ
久しきと云つて
河原のほとけに
ありとの事
ありと云れどわ
久しきと云つて
されはる事
ありと云れどわ
久しきと云つて

河原のほとけに祈りて
ありとの事
ありと云れどわ
久しきと云つて
されはる事
ありと云れどわ
久しきと云つて
天喜四年四月
後冷泉院御
上東門院御
ありとの事
ありと云れどわ
久しきと云つて

詞又二

芦田鶴とよみ合せ
餘法ありと云
名法乃其所の
いよ金葉集
ありと云れどわ
久しきと云つて

河原院より
ありとの事
ありと云れどわ
久しきと云つて
上東門院御
ありとの事
ありと云れどわ
久しきと云つて
河原院より
ありとの事
ありと云れどわ
久しきと云つて

后三条院御名
 延久五年二月廿五日也
 兼も物成共六杯の事
 之の事にもあり
 まするゆへに
 けり兼も物成三平
 の女房の事いふ所
 丁午の御入非の
 拾遺おまへり
 人非れおせをさ
 へすすなりぬ
 又同集久しくい
 れぬとも位者の
 やつていせつ
 らんこのあ首より

后三条院乃丁午より
 よめる
 後人志
 丁午の御入非の事いふ所
 神より人すなりぬ
 へはさるる御名
 まうとよめる
 大納言 経信
 丁午より御入非の事いふ所
 ねいといふ御名
 らんこのあ首より

詞三

別 様形乃別

子やこいさくおわつら
 廣葉中経乃りな
 せに於てくすまよ
 おわつらあをい
 おひる中も
 けいおわつらあをい
 らいぬ中あつた今
 様おをいり
 おわつらあをい

詞和歌集卷第六 別

恭議廣葉
 乃の子より下り
 民部内侍
 子やこいさくおわつらあをい
 おわつらあをい
 なる真の事そのち
 今おれが子あ
 けりりりり 和泉武部

「まゆみ」の文
もつとにいま
三つねねのまゆみ
読むふのまゆみ
「まゆみ」の
まゆみの
まゆみに
の國といふ
まゆみ
まゆみ
まゆみ
まゆみ

まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに
まゆみに

源信光朝臣

若原補尹朝臣

まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの

まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの
まゆみの

若原補尹朝臣

若原補尹朝臣

ことせむらうまきふ
 大事に但限る年
 ありし年幸めの時
 子より来りて
 了上はされはる年
 年々もや子に幸
 しくゆつれと我
 せえ結付るる
 ありぬす日ひび
 花葉子云淨りめ
 二月日向下る路
 はず。麻乃中より
 流るる月ひと花
 子持出て縁人あり

ありぬす日ひび
 まりし年幸めの時
 子より来りて
 了上はされはる年
 年々もや子に幸
 しくゆつれと我
 せえ結付るる
 ありぬす日ひび
 花葉子云淨りめ
 二月日向下る路
 はず。麻乃中より
 流るる月ひと花
 子持出て縁人あり

聖二

井より中將のり
 ありし年幸めの時
 子より来りて
 了上はされはる年
 年々もや子に幸
 しくゆつれと我
 せえ結付るる
 ありぬす日ひび
 花葉子云淨りめ
 二月日向下る路
 はず。麻乃中より
 流るる月ひと花
 子持出て縁人あり

法橋有祥 永徳
 われちり葉花をわけん
 月吐人乃ちふらり
 ありぬす日ひび
 まりし年幸めの時
 子より来りて
 了上はされはる年
 年々もや子に幸
 しくゆつれと我
 せえ結付るる
 ありぬす日ひび
 花葉子云淨りめ
 二月日向下る路
 はず。麻乃中より
 流るる月ひと花
 子持出て縁人あり

心明かし

さあさんともいひし
いつとてうらなひの
内は我孫の柄ありと
とさういふふるんと
もらふししとて
すこし本比寂之の
柄未久候初の入唐
多れは徳と辨と
さういふふるんと
わが一心を君より
めまされい我を我
易く別りわすれ
君より我別るるを
能くしとのさうか

寂照法師 大に法基

さあさんともいひし
いつとて片われす
人りもよき此は
事にあひく
備那法流 泰源の孫
少くもまをさ
我よりわすれ
大納言経信大宰大守
侍りしは備那

これいふのうらなひ
備那のうらなひ
西より東へ
又言入日分
さう言と我に
御は出る日
那の言は我に
てさういふ
とせま

何れもらり
下細國奥列
乃とて
とりめり
つた下知
てか

いひしは
これいふのうらなひ
いふは

備那仲
さういふ
大納言
て報

何れもらり
いひしは
備那大守
らん

とてんとうりの家の
る所をひきつけよ
ゆるぎなく

とらわれぬまは
生ね後かほら
りとうねまうと
ねる年のおくれ
石手とせし後
ふせのたこま
けたしちのち
そのし

とてんとうりの家の
傀儡の後のま
ゆるぎなく
人とうり
のまは
とてんとうりの家の

ほりりりりり 推備正米縁

とらわれぬまは
とてんとうりの家の

何となくあつた
ゆるぎなく

傀儡

とてんとうりの家の
とらわれぬまは

